

古代エジプト文明と現代の環境問題

吉村 作治

はじめに

「環境問題は難しい」と実感している人は多いと思う。その理由は、語ると必ず自分に返って来るし、痛みを受けるからだ。そこで今回、視点を変えて「エジプト文明から見た現代の環境問題」とすることにした。エジプトを例に出した理由は、私の専門がエジプト文明であるからで、「エジプト」を「古代文明」と置き換えてもらってもいいと考えている。

以下、

- I. 環境問題とは何か
- II. 古代エジプト文明の特徴
- III. 古代エジプト文明から見えてくる環境問題の本質
- IV. 今、どうすれば環境問題を解決できるのか

の4章に分けて論じることとする。

I. 環境問題とは何か

「21世紀は環境改善の世紀」と位置付けて京都議定書も作られた。もちろん、この議定書も理想には程遠いものであったが、人類にとってははともかく一歩前進したものと世界の人々から一定の評価を受けた。ただ、この京都議定書の大きな問題点は、環境問題を地球温暖化問題に絞り、大気中の温室効果ガス（二酸化炭素、メタン、一酸化二窒素、HFC類、PFC類、SF₆）の割合にのみ規定したことにある。

すなわち、文明の進化度をエネルギー問題に押し付け、あたかもエネルギー問題が解決すればすべての環境問題は解決するが如き錯覚をもたらしたのである。それ以前に、地球の気候変動が本当に大気中の温室効果ガスの割合にのみ起因しているのか、地球温暖化が人類に及ぼす害のどの程度に当たっているのか、ひいては人類の害と地球すなわち自然の害とはいったいどういうものかを深

刻に検証しないで、ムードというか感傷的に地球温暖化イコール環境悪化の原因としたところに実は大きな問題がある。

まず、「地球の環境を良い状態で守ろう」という大前提は非常に重要なことである。例えば食糧について見てみると、現在、地球の人口は大雑把に言って73億人¹⁾とされている。そして100億人を超えることはここ数十年以内に迫っている。その人口を賄うことのできる食糧を確保することは不可能である。今でも、アフリカ諸国を筆頭に子供たちが犠牲になり、毎日数万人の餓死が起きている状況である。しかし、それを解決する方法を持っていない。

食糧だけではない。エネルギーの問題も深刻となっている。まず、食糧の煮炊きを使う燃料も地球全体では不足している。一方、焼畑農業のように、原生林に火をつけて燃やし、そこを農耕地にしている地域もいまだ存在する。それだけではなく、文明化されている地域では冷房・暖房・空気清浄だけではなく、炊飯にすら電気を使っている。

例えば石油は、それを直接燃料として使うというより、一旦電気に変えて、その電気を使用することで人類は日々の快適な生活を送っている。そのため、発電は石油や石炭を使って行っているのは需要に追いついて行けないので、ウランを利用して核分裂を起こさせ、原子力発電を行い始めてはや60年²⁾が経過している。

しかし、その結果一大地震が直接的な引き金となったものの、福島県において東京電力の福島第一原子力発電所が爆発し、あれから4年が経とうとしているのに未だに収束を見ない。さらに今、人類は自分たちの良い生活のため、石油・石炭・ウランだけでなく、シェールガス等、地球の資源を飲み込むように搾取している。その反面、水力発電や風力発電、太陽光発電と再生可能なエネルギー資源の確保に向かってはいるが、未だ道遠である（表1）。

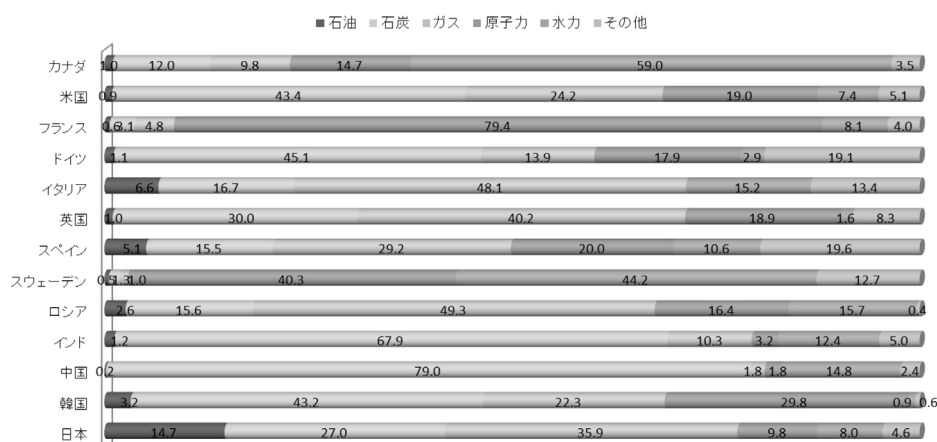


表1 主要国の発電電力量の電源構成 (2011年) (出典: OECD/IEA)

一方、こうした問題だけではなく、ゴミの問題も各地方自治体にとっては頭の痛いものである。私が子供の頃はゴミの収集車などはなかった。各家庭が各人の努力で始末していたのである。それが今や、ゴミ処理は各自治体にとっての大きな悩みとなっている。

そして、水利の問題も大きなものとなっている。ナイル川³⁾やチグリス川、ユーフラテス川などにはそれぞれの国が水利権を持っているが、やはり上流の国の方が有利である。おそらく、世界人口が100億人となる前に水は完全に不足し、水利を争って国が戦争をする時が来るものと思われる。「水と電気はタダ」と能天気なことを言っていた頃が懐かしい。

また、周知のように、自動車が吐き出す排気ガスが大気を汚染して、人々が住んでいられないというところも出てきた。それが高じて、中国のPM2.5の問題も起きている。

それでは、こういった環境問題の根本的な原因は何であろうか。それは人口の爆発的な増加によるものである。少子高齢化で悩む日本では考えられないことだが、地球上では人口増が環境問題の中心的なものである。そして、人類が自分たちの利益のために色々とモノを作って、壊して、捨てるといった工業化の問題もあるが、それすらも人口増からくる影響と言えるのだ。

よって、現在の地球環境悪化の原因は、人口増と「強欲な」人間の増加にあると考えるべきである。では、古代文明には環境問題と思われる事象があったのかということについて考えてみることにする。

II. 古代エジプト文明の特徴

古代文明は地球上に多数存在している。それぞれの地理的条件や取り囲む環境によって、宗教や文化、経済活動にいろいろと特徴がある。本稿では、そうした各文明の特徴を検証するには枚数も限られているので、私が最も理解している古代エジプト文明と現代文明を比較すると2つの点で理解しやすいと思う。

まず挙げられるのは、「人口が少ない」ということである。古代エジプトはピラミッド時代で人口300万人と考えられている⁴⁾(表2)。現在のエジプトは人口が9千万人に近づいている⁵⁾。つまり、5000年間で30倍となった勘定である。もっとも、私が初めてエジプトに行った1966年の人口は3千万人であった⁶⁾ので、ここ50年近くで3倍の人口増というわけである。まさしく今の地球の問題の先頭を行っているところである。よって、食糧が足りない、社会インフラが整備されていない、貧富の差が激しいといった、「現代病」にかかっている。

しかし、今から5千年前のエジプトはどうであったろうか。文献を読み解くと、人々は幸せに平凡に暮らしていて、特に盛んにピラミッドの造営が行われた古王国時代(紀元前2687年~2191年)⁷⁾には、巨大なピラミッド建設に多くの人が携わり、それぞれの人々がその日その日を楽しみに生きていたようである。食糧が不足して餓死するようなことは、アスワンのすぐ南に位置するサイヘル島の『飢饉の碑』や、サッカラにあるウナス王のピラミッド参道に描かれたレリーフの図像(図1)などから、実際に古代エジプト王朝時代を通じて何度かあった

表2 古代エジプト各時代の人口推定（出典：古谷野 1998、p.95）

期 間	人口(万人)	資 料
〈先王朝時代〉		
前5000年	10	McEvedy, C. & Jones, R.
	10	McEvedy, C.
前4000年	25	McEvedy, C. & Jones, R.
	35	Butzer, K.
〈王朝時代〉		
前3000年	87	Butzer, K.
	100	McEvedy, C. & Jones, R.
前2500年	100	Hobbs, J.J.
	160	Butzer, K.
	300	Eigenbach, R.
第6王朝（前2345-2181年頃）	300	Mumford, L.
前2000年	160	Aldred, C.
前1800年	200	Butzer, K.
前1500年	290	Butzer, K.
トトメス3世（前1479-1425年頃）	600	Pirenne, J.
前1292-1225年	300*	Diodorus（前90-20年頃）
前1250年	160	Wilson, J.
	280	O'Connor, D.
	400	Vercotter, J.
	450	Baer, G.
	500	Butzer, K.
新王国時代	350	Freeman, C.
前500年	300	Whitmore, T.M. <i>et al.</i>
新王国時代末期	290-450	Trigger, B.G. <i>et al.</i>
前4世紀	240	Hobbs, J.J.
	350	McEvedy, C.
	400	McEvedy, C. & Jones, R.
前2世紀	500	Butzer, K.
前200年	200	McEvedy, C.
前1世紀	450	Russell, W.M.S.
	500	Hobbs, J.J.
	700-750	Petrie, W.M.F.
〈グレコ・ローマン時代〉		
プトレマイオス朝（前332-30年）	700	Hamdan, G.
	800-850	Walek & Czernecki, T.
	1,000	Belock, J.
前30年	700	Breasted, J.H.
紀元前後	400	McEvedy, C. & Jones, R.
ローマ支配時代（前30-後395年）	500	Beloch, K.
	750	Josephus, F.（アレキサンドリアを除く）
	800	Mommsen, T.
	850-900	Walek & Czernecki, T.
グレコ・ローマン時代	700-750	Trigger, B.G. <i>et al.</i>

*：ある版によれば700万人。ヨセフス（Josephus, F.）が引用している数値は750万人。

注：あまりにも過大な人口推定をしたと考えられるものは、表から除く。

資料：Butzer, K., 1960, pp.5-36；1976, p.83, McEvedy, C. and Jones, R., 1978, pp.226-9, Hamdan, G., 1984, p.19, Mithad, M.J., 1984, pp.44-9, Strouhal, R., 1992, pp.134-5, McEvedy, C., 1970, などにより作成。

ことは確実視されているが⁸⁾、おおむね人々は食べるものには困ったりはしなかった。その決定的な理由として、人口が多からず少なからず低いレベルで安定していたことがある。

エジプトは当時の北アフリカ、中近東、南ヨーロッパの中では最も医療が充実していて、外国から治療に入学してきていた人がいたほどであるにもかかわらず、寿命が短かった。もっとも、成年男子で40歳、王や高官で50歳という寿命⁹⁾が長いのか短いのかの判断には困るとしても、古代の民族の中では寿命は長い方と断言してもいいと思う。それは医療が発達していて、治療費が無料だった¹⁰⁾ことによるようだ。しかし、乳幼児の死亡率は他の国や地域と比べても良いとは言えない。そのため、子供



図1 飢饉のために栄養失調で骨と皮になったベドウィン（遊牧民）の姿を描いたレリーフ。ウナス王のピラミッド参道出土。古王国時代第5王朝。（サッカラ、イムヘテブ博物館所蔵）

が産まれたことを5歳から6歳になるまで他人に言わないという風習があったようだ。他人に見せびらかすと、子供に悪魔が乗り移って殺してしまうという迷信が行き渡っていたようだ。

また、古代エジプト文明の最大の特徴はその宗教にある。その宗教は自然崇拝で、自然をすべて神に見立て、崇拝していたのである。まさしく良き時代の日本の神道のようなものである。もっとも、紀元前三千年紀から千年紀にかけての地球上では、ほとんどの地域で自然崇拝が行われていた。

一部の人間が自然崇拝から人間崇拝になったのは、ヤハウェがモーゼに「他の神々が、あなたのためにわたしの面前にあってはならない。あなたは自分のために像を作ってはならない。上は天にあり、下は地にあり、また地の下の水の中にあるものいかなる形も〔作ってはならない〕。あなたはそれらにひれ伏しても、それらに仕えさせられてもならない。まことに、わたしヤハウェ、あなたの神は、熱愛する神である。わたしを憎む者には、父たちの罪を息子たち、三代目の者たち、四代目の者たちに報い、わたしを愛する者たち、わたしの命令を守る者たちには、いくつもの氏族に〔まで〕恵みを行うものである」¹⁰⁾と、多くの神々の中からヤハウェを選択させたところから始まり、キリスト教のイエス、イスラム教のムハンマドと、預言者による誘導によって一神崇拝が広まった。今ではこの3つの宗教で世界の人口の2分の1、これに仏教も入れると3分の2は人間崇拝となり、自然と訣別してしまったのである。

自然崇拝の最もいいところは、「全てのこの世の自然は、海も山も太陽も草木も動物も崇拝に値する」という観点である。このことはつまり、自然を敬うばかりではなく、同時に自然を畏れるということである。古代エジプト人、いや、古代の人々はみな、天動説の世界で、太陽が朝から昼、昼から夜と私たち人間を見守っているという感覚を持っていたのである。そして、太陽が一日の初めに東の空に出て、夕方、西の空に沈んでいくとき「また明日も来ていただけるのかな。来ていただきたいなあ」と願い、祈り、一日を終えていたのである。この太陽の動きから、世の中はぐるぐる回る、すなわち「循環型」の思想体系が生み出されたのである。環境問題ではこの循環型の思想がとても重要である。

Ⅲ. 古代エジプト文明から見えてくる環境問題の本質

この、太陽の動きから着想を得た循環思想というのは、太陽の動きだけではなく、いろいろな局面で大切になってくる。

古代エジプト人の発想の素晴らしさは「あの世」の設定にある。「設定」と言うより「発明」と言った方がいいかもしれない。「あの世」とは人が死んでから行くところである。もともと、「あの世」の住人は神々で、1000柱以上の自然現象を司る神々が設定されている。

この世は人間、あの世は神の領域と考え、あの世の住人である神々がこの世に儀式や祭典で来た時の休憩所として神殿が造られた。そしてその神殿の壁には、この世に来た神が行くところを間違わないように神々の姿が描かれている。

この世の住人である人間は、死してあの世に行くことができれば永遠の住処が提示される(図2)。ただし、誰もがあの世には行けるわけではない。この世で生きている間に42の大罪を犯していないことが条件である。42の大罪とは殺人などの真の大罪もあるが、嘘をつくとか人をだますといったモラル的なものもある¹⁰⁾。

そして、人は死んだ70日後に、この世とあの世の国境にて最後の審判が行われる(図3)。裁判長はあの世の王であるオシリス神、検事役にジャッカルの頭部をもつアヌビス神が当たり、その他の神々が裁判を見守る。裁判の後、「天秤の審判」が行われる。このときも裁判長はオシリス神、検事役はアヌビス神で、死者の心臓を天秤の片方にのせ、もう片方に真実を司るマアト女神の羽を載せる。そして平衡が得られれば死者は無罪となり、アヌビスというあの世への入国のカギが渡される。もし不幸にして有罪となったらどうなるかというと、死者の魂(バア)が鳥の姿で裁判所の上空を飛んでいるのであるが、そのバアが失速して裁判所の中庭が裂けてそこに落ちる。そこには火焰地獄なので即座に焼け死ぬことになっている。これを再死といい、二度と復活できない。そして死者の心臓は天秤の皿から転げ落ち、そこに待機しているアメイトという怪獣に食われてしまう。

こうした裁判の設定は、古代エジプトの宗教を否定したユダヤ教にも引き継がれ、また、キリスト教もイスラム教も引き継がれている。であるから、古代エジプトの

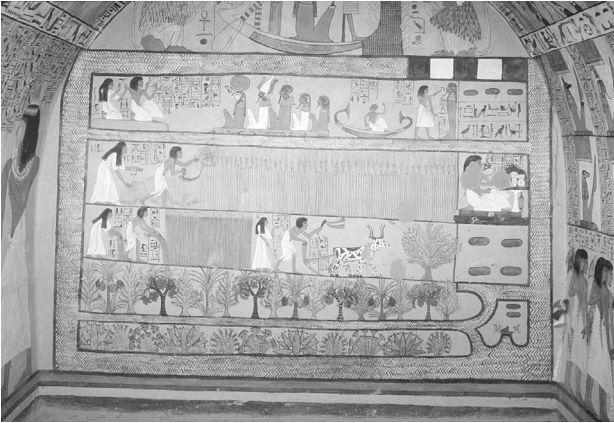


図2 古代エジプトの「イアル野」と呼ばれる来世を描いた壁画。新王国時代第19王朝。(ルクソール西岸、センネジェムの墓)

宗教の本質はユダヤ教にもキリスト教にもイスラム教にも引き継がれているのだ。ただ一点、異なっているのは、古代エジプトの宗教は自然を神様として崇められている「多神教」で、ユダヤ教・キリスト教・イスラム教はたった一柱の神（ユダヤ教ではヤハウェ、キリスト教ではエホバ、イスラム教ではアッラー）を崇める「一神教」であるという点だけである。

ここでもうひとつ大切なことは、死後、最後の審判で無罪となりあの世に行った人物が年に一度、この世に戻ってくるという思想である。日本式に言うならばお彼岸の日でもあり、こちらは年に2回となっているが、古代エジプトの方が年代的にずっと古いことから、この考え方の起源は古代エジプトに求められる。

あの世から戻ってきて、子孫の無事と繁栄を見てあの世にまた戻るわけであるが、どこで出会うかというところ、その場所とは墓である。よって、墓にはミイラが無くてはならない。あの世からこの世に来るのは鳥の姿をしたバアであり、墓の中のミイラにバアが入り込むことで、この世での再生・復活を果たすというわけである（図4）。

古代エジプト人は、「人間が活着している」ということは「肉体と精神が一体となっていること」で、「死ぬこと」は「この2つが分かれてしまうこと」と考えた。そして、便宜的に精神をこの世に残ってミイラとなった肉体を守るカア（霊）と鳥の姿となってあの世に行き永遠の生命を持つバア（魂）とに分けた（図5、図6）。その3つが墓の中で合体したところに子孫がやってきて祈るといことになる。そのとき、あの世からはるばる何

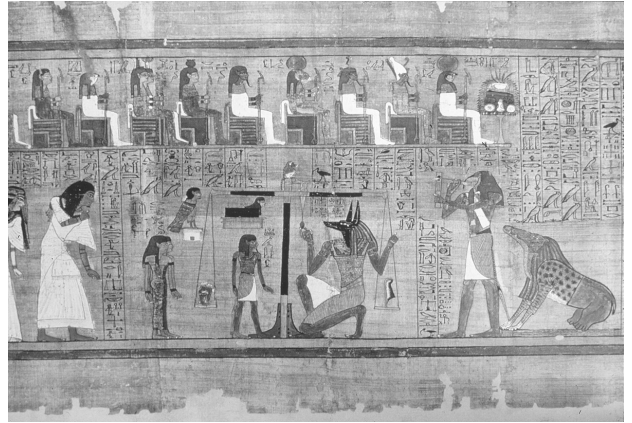


図3 「死者の書」に描かれた最後の審判の様子。中央に心臓と羽を載せた天秤が、そのすぐ右側にはアヌビス神の姿が描かれている。右端に描かれた奇妙な生物が、文中で触れているアメイト。新王国時代第19王朝。(大英博物館所蔵)



図4 ラムセス2世のミイラ。新王国時代第19王朝。(カイロ博物館所蔵)

千里と旅をしてきたバアが自分の肉体を見間違えないように、ミイラにはマスクをつけることとしたのである。

この思想も循環型そのものである。この死生観は、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教、仏教ともに同じものである。この思想を達成させるために、古代エジプト人は様々な技術を発明した。ミイラ製作法、墓や神殿の造営法、船の建造法など、これら全ては「死」にまつわる行事のために開発された技術である。それが普遍化され、日常生活に浸透したというわけである。

この他、古代エジプト人の住まいにも循環型の発想を窺い知ることができる。エジプトの気候は、地中海周辺のごくわずかなところを除いて、今でもそうであるが乾燥気候で雨がほとんど降らない。よって、人々は自分の

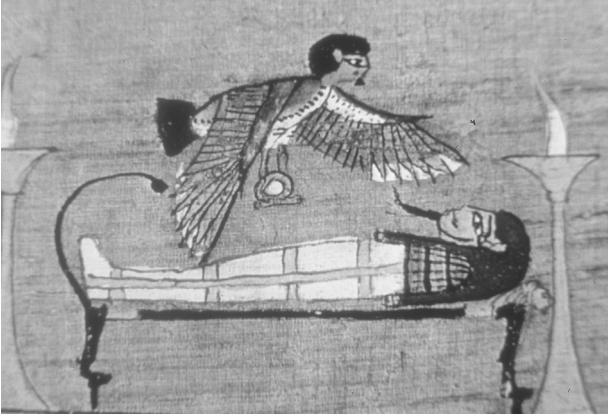


図5 「死者の書」に描かれた鳥の姿をした「バア」の姿。新王国時代第19王朝。(大英博物館所蔵)

家を日乾レンガで造っていた。日乾レンガはその字の如く、土をこねて型に入れ乾燥させて造るもので、それを積み上げて壁を作り、屋根には植物の葉などを載せて完成という簡素なものである。

古代エジプトでは、男子が15歳になると成人とされ、家族から独立して新しい自分の家を造っていた。しかし、実家の父親が死ぬと、その家を壊して、主材料である日乾レンガを再び泥にして畑に返すのだ。それまで何十年もの間、壁として作物を育てることなく休んでいたのだから、その泥には栄養分がたっぷり含まれ、作物を育てるには最適というわけである。自然の摂理とはいえ、素晴らしい応用であると言える。

しかし、物質が限られている中、形見分けはしなかった。生前使っていたものはあの世でも必要だということで、墓の中にミイラとともに入れたのである。これだけを聞くと、この点においては循環型は崩れているのではないかと考える向きもあるかもしれないが、それは違うのである。というのは、アクセサリーをはじめ、形見分けとなり得るものには技術がその後ろにある。もし、自分のものを形見分けして次の人に渡したら、技術を持った職人達は不要になってしまう。よって、一旦作ったものを墓に入れた方が、技術は伝承されるのである。このように、古代エジプトは思想と行動が一致しているのである。

古代エジプトは物資が少ないということもあったが、それらを大切に使っていた。例えば日常使われる容器は土器なので良く壊れる。それを捨てるのではなく、紙の

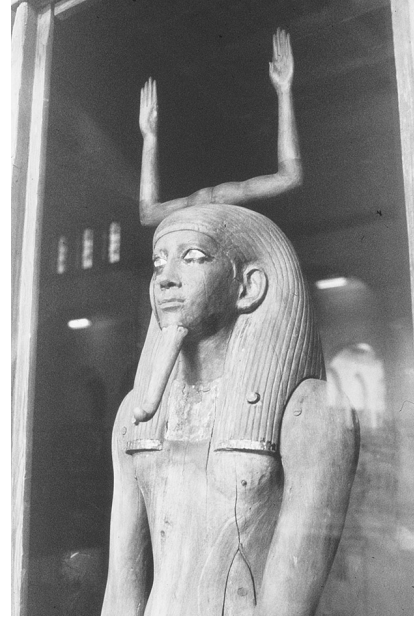


図6 ホル王の「カア」像。中王国時代第13王朝。(カイロ博物館所蔵)

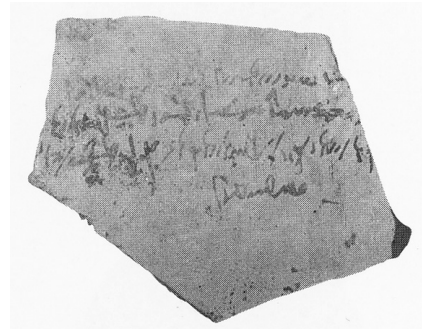


図7 マルカタ南遺跡出土のオストラコン。紀元後56/57年、ローマ皇帝ネロの治世第3年の水路税の領収書。(早稲田大学エジプト学研究所所蔵)

代わりにして使うのだ。土器片に文字が書かれたものをオストラコン(図7)というが、証文、友達への手紙、公式文書、そして一番大切なものとしては、お彼岸の時、この世に来ていただいた先祖様に解決のつかないことをお伺いするために使った。綿々と書き綴った手紙の答えは、墓参りをした日の夜に夢の中で先祖から回答を得られるというのである。そのため、夢解き人(占い師のような者)がいて、当事者が夢の内容を語るときちゃんと解き明かしてくれる役割を持っていた。これは廃物利用の一例であるが、換言すれば古代エジプトではゴミはそれほど出なかったということである。

このように、古代エジプトでは思想も現実も全て循環

型となっていて、生活に無駄がないという理想的な環境にあった。加えてもう1つ、とても大切なナイル川を例に挙げることにする。ナイル川は1年に1回氾濫する。エジプトではナイル川は6月下旬から徐々に水面が上ががり、耕作地は水浸しになる。私が初めて行った1966年には、もうアスワンハイダムが出来かかっている、氾濫は限定的であったが、ルクソール西岸のメンノンの巨像がある一帯はまだ水浸しになっていた（図8）。ともかく、7月から10月の4か月、ナイル川周辺の土地は冠水して、農業ができない状況であった。これも毎年のもので、このナイル川の氾濫が何メートルかによってこの年の収穫が分かるということで、エジプト各地のナイル川沿いにナイロメーターと呼ばれるものが造られていて、今でも残っている（図9）。

この氾濫によって、上流のスーダンやエチオピアの肥沃な土、シルトが水とともに運ばれてエジプト各地に沈

殿し、土地をリフレッシュしてくれるのだ。ギリシアの歴史家ヘロドトスが「エジプトはナイルの賜物」¹³⁾といったのはこういう意味なのである。水が引いた後には、十分な水分と滋養のある土が残り、棒で地面に穴を開け、そこに種を撒けば4か月後にはたわわに実った小麦・大麦が収穫できるというわけである。よって、古代だけでなく20世紀の故・ナセル大統領の時代まで、ナイル川の上流にダムを造るという乱暴なことは発想すらなかった（図10）。

しかし、アスワンハイダムを造った故・ナセル大統領を非難することはできない。故・ナセル大統領は当時3千万人の人口を抱えていたエジプトで、その時もすでに主食のパンを作る小麦が足りなくなり始めていたので、夏場のナイルの氾濫をやめさせれば、1年の間に2毛作で小麦が収穫でき、外国に小麦の供給を頼らなくてもいいのではないかと考えたのである。

これは机上の論としては筋が通っている。実際、故・ナセル大統領がアスワンハイダム建設資金の援助を世界銀行に頼んで断られたために第二次中東戦争が始まったのであるから、これは大変な決断であった。その戦争はあっけなく終わり、ソ連が資金を提供することで決着したのだが、実際にアスワンに大きなダムを造っていくうちにいくつかの問題点が出てきた。

アスワンは地中海から1100キロ南へアフリカ大陸に入ったところにあり、乾燥気候の真ただ中である。そこに幅20キロ、長さ550キロの湖ができたのである。そしてケニアのビクトリア湖、エチオピアのタナ湖から水が滔々と流れ込んで来るので、アスワンハイダムで堰き止められたナセル湖からは水が蒸発していき、5千年以上雲1



図8 1966年当時のメンノンの巨像。左側に氾濫による冠水の痕跡がうかがえる。新王国時代第18王朝。



図9 エレファンティネ島のナイロメーター。ローマ時代（紀元前30年～紀元後337年）



図10 アスワンハイダム遠景。

つなかつたアスワンに雲が出来、時には雨が降るようになった。

しかも、肥沃なシルトはアスワンハイダムのアフリカ側にたまり、下流に流れなくなった。その上、アスワンの標高の高い場所に湖ができたことで、アスワン以北の地下水脈が上昇してしまったのである。そのため、アスワン以北のエジプト（エジプトの耕作地のほとんど）での塩害がひどくなり、土地に中和剤を撒く必要が出てきた。

エジプト政府はナイル川の周辺、特に低位砂漠との境に小さな運河を造ってアスワンハイダムから水を供給したが、大きな改善には至らなかった。その後、ナセル湖（アスワンハイダムの巨大な貯水池）の水をアスワンハイダム上流120キロのトシュカから北西の低地へ流し、広大な耕地を開発する「トシュカ・プロジェクト」が行われている¹⁴⁾。

こうした努力はとても大切だが、故・ナセル大統領が「何故古代エジプト人がアスワンハイダムを造らなかつたか」ということを十分に考えていれば、そもそもアスワンハイダムが造られることはなかつたと思われる。結局、アスワンハイダムによって作られた新しい耕作地からの収穫は、3～4割の増収があつた程度で、不足分は米国からの小麦の輸入に頼っているのである¹⁵⁾。結果的に、「食糧を自給できないと、輸入元の国の言うことを聞かねばならなくなる」という故・ナセル大統領の心配は、何の解決もされなかつただけでなく、エジプトの大地を悪化させただけだつた。

IV. 今、どうすれば環境問題を解決できるのか

「21世紀は環境の世紀だ」というスローガンは、今では聞かれなくなつてしまつた。一つはリーマンショックをはじめ経済状況が全世界的に悪化して、環境に目が向かなくなつてしまつたことが原因だと思われる。豊かな経済を象徴するような、生活を快適にする、あるいは楽しく暮らすという要素は、環境問題とは対立する。

地球環境を人類の生存に適するように維持するためには、まず工業・経済中心の発展主義をストップさせ、逆戻りさせなければならぬ。ある電車内の広告を見ていたら、『フランス人は10着しか服を持たない』という本

が30万部も売れているとあつた。このような習慣が流行れば、洋服メーカーや販売店は困ることになると思われる。しかし、ここで重要なポイントがある。「10着でも9着でもいいから、不必要なものは買わない」、というポリシーだ。1着だと5000円、2着で7500円、3着で1万円というジャケットがあると仮定する。1万円を3で割ると3333円となり、大変得だと感じ、購入に結び付く。しかし、これでいいのだろうか。3着のうち2着はすぐに不要になり、1着だけしか使わなくなることも十分に考えられる。そしてあとの2着はゴミ箱行きになり、結果的に不要なものを購入したということになる。こうしたことを繰り返すことで、社会が疲弊してくるのである。高い製品を1着買い、大切に長く使う文化こそが、21世紀の生き方ではないだろうか。

環境問題を語る際、必ず出てくる文句に「今更、縄文時代には戻れない」というのがある。しかし、これは至極当然で、こんなことを言う人のセンス自体を疑つてしまふ。誰も縄文時代に戻ろうなんて言つてはいない。地球をこれ以上搾取し続けると地球が破壊され、人類が住めなくなるのを防ぐということが重要なのである。

エネルギー、食糧、ゴミ、資源枯渇の問題も全て環境問題であるが、その中心にあるのが人口問題であることを知るべきである。物の消費が必要という観点に立てば、人口増加は資本主義には不可欠である。しかし、これは回避できる問題である。少し考えを変えて、大量生産大量消費型の経済指向から、「もったいない」精神を生かしたモノづくりをすべきではないだろうか。

それと、「リサイクル」ではなく、「リユース」の社会に変えるべきではないだろうか。例えば、ワインの瓶などをプラスチックにするのではなく、瓶を回収する方へ向かうべきである。そして、価格に瓶の回収費を加えるのがいいと考える。私が子供の頃、服の「おさがり」は家庭単位だけでなく近所付き合いの中で行われていた。つまり、物を大切にすることが環境を救うのである。

そして、リユースこそ循環型文明の旗振り役となると考えられる。しかし、そういったことを生活の細部でやっても環境の悪化は避けられないことは容易に想像がつく。その解決策はやはり人口減少にある。100億人を超えたら人類は生き延びることができないと環境主義者は主張しているが、女性の子供を産む権利の問題、宗教的な問

題、社会的な視野に立った人口制御の問題などを勘案した上で、ともかく1日も早く人口増加をストップさせ、減少化に向かわないと本当に大変なことになる。

古代社会、特に古代エジプトは生き方、人生観そのものが循環型であり、尚且つファラオといった卓抜な人材のもと、宗教によって統率された社会であったが、何と言っても人口が少なかったことが幸いしていたのである。ピラミッド時代で300万人、クレオパトラの時代でも500万人という人口¹⁶⁾は、国土の広さから見ると十分自力で全てを賄っていたのである。

こうしたことを再考した上で、これからの国連の役割は、地域間の交流にも増して、自国のことは自国の力で解決することを前提に国家運営を行う国のみと密接な関係を構築することであると言える。そうすると、残念ながら日本は真っ先にその資格がない国ということになる。

東日本大震災以降、「環境問題」と言うと原発事故にばかり焦点が当てられることが多い。それも大切であるが、もっと大局的な立場から改めて環境問題に取り組んでいく必要性を強く感じるのである。

(学校法人昌平聳 東日本国際大学副学長 福祉環境学部教授 (工学博士))

[註]

- 1) 『世界人口白書2014 (日本語版)』 p.2
(<http://www.unfpa.or.jp/cmsdesigner/data/entry/publications/publications.00042.00000005.pdf>)
- 2) 世界初の原子力発電所・ソビエト連邦のオブニスク原子力発電所が1954年6月に稼働したことを起点とする。
- 3) 『ナイル川流域国間の水資源問題』(独立行政法人国際協力機構HP)
<http://www.jica.go.jp/project/egypt/0702252/news/column/20101221.html>
- 4) 古谷野 1998, pp.94-97.
- 5) 2014年のエジプト中央動員統計局の情報によれば、8600万人とされている。
- 6) 吉村、店田 1990, p.28.

- 7) 本稿では古代エジプトの年代はRedford, D.B. 2001による。
- 8) Vandier, J. 1936.
- 9) 吉村、店田 1990, p.5
- 10) 例えばディオドロスによれば、「従軍や国内旅行の際には誰でも無料で治療が受けられた」という記述があることから(『図書館』第一巻、八二)、ある種の人々は無料の医療的援助があったとされている。
- 11) 木幡、山我 2000, pp.89-91.
- 12) Simpson, W.K.(ed.) 2003, pp.267-277.
- 13) ヘロドトス 1971, p.189
- 14) 社団法人 海外コンサルティング企業協会、八千代エンジニアリング株式会社 2007, pp.27-29.
- 15) 土屋 2004, p.40
- 16) 古谷野 1998, pp.94-97.

[主要参考文献]

- エヴェン・ストロウハル著、内田杉彦訳 1996: 『古代エジプト生活誌』(上、下)、原書房。
- 木幡藤子、山我哲雄 2000: 『<旧約聖書Ⅱ>出エジプト記 レビ記』、岩波書店。
- 古谷野晃 1998: 『古代エジプト 都市文明の誕生』、古今書院。
- 土屋一樹 2004: 「変革期を迎えたエジプトの小麦流通—小麦流通構造と食料補助制度の変遷—」、『現代の中東 36 (2004.1)』、pp.36-53.
- ヘロドトス著、松平千秋訳 1971: 『歴史』(上)、岩波文庫。
- 八千代エンジニアリング株式会社 2007: 『ナセル湖上流域総合環境改善事業調査 調査報告書』、社団法人 海外コンサルティング企業協会。
- 吉村作治、店田廣文 1990: 『エジプトの高齢者—古代と現代—』、早稲田大学人間総合研究センター 流動化社会と生活の質プロジェクト。
- Redford, D.B. (ed.) 2001: The Oxford Encyclopedia of Ancient Egypt, Vol.1-3, Oxford.
- Simpson, W.K. (ed.) 2003: The Literature of Ancient Egypt, An Anthology of Stories, Instructions, Stelae, Autobiographies, and Poetry,

Third Edition, Yale University Press.

Vandier, J. 1936: La famine dans l'Egypte
ancienne, Cairo.

※本文で使用している写真はすべて©早稲田大学エジプ
ト学研究所

Environmental problems of Ancient Egypt and present age

Sakuji Yoshimura

Abstract

Now, environmental problems are biggest problem for our Earth. But in Japan, after the Great East Japan Earthquake, the environmental problem is focused on only to Fukushima Daiichi nuclear disaster. And all Japanese live in aging society with a falling birth rate, so we Japanese are insensible to the problem of the growth of population. It is the center of environmental problem. In such situation, I think about the environmental problems from the other viewpoint, ancient Egypt, it's my field of study. And I think about the problem of the growth of population from the viewpoint of not a Japanese but a member of the earth where does not have a substitute.

Key words : environmental problem, Ancient Egypt, growth of population

